

# 防災教育・周知啓発ワーキンググループ 防災教育チーム (第4回) 議事要旨

## 1. 日時

令和3年3月2日(火) 10:00~11:30

## 2. 出席者

片田座長、畦地委員、江口委員、大木委員、加藤委員、橋爪委員、矢守委員  
関係省庁〔内閣官房(国土強靱化推進室)、消防庁、文部科学省(総合教育政策局)、国土交通省(水管理・国土保全局)、気象庁、赤澤副大臣、村手官房審議官(防災担当)、内田官房審議官(防災担当)〕

## 3. 議題

(1) 開会挨拶

(2) 「既存の枠組みにおける防災教育の改善ポイント」

慶應義塾大学環境情報学部 准教授 大木 聖子

(3) 発表

LINE株式会社 執行役員 公共政策・CSR担当 江口 清貴

(4) 意見交換

(5) 閉会

## 4. 議事要旨

開会挨拶において、赤澤副大臣から下記の発言があった。

- すべての義務教育機関が、地域の災害リスクや正常性バイアス等の知識を教え、それに基づく避難訓練を実践する防災教育を行うことが必要。
- 非認知能力を育むために防災教育は最適であり、これについて世の中の認知を得るためには長期的・広域的効果のエビデンスを確立することが必要。
- 命を守る防災教育は必要不可欠であり、既存のコマの中でうまく防災教育を絡めるなど、現場の負担を極力増やさない工夫が重要。
- 文部科学省にはさらに詳細に防災教育の実態を調査し、すべての義務教育機関での防災教育の実施を徹底してほしい。

次に大木委員から、既存の枠組みにおける防災教育の改善ポイントについて、下記の説明があった。

- 小中学校の避難訓練を現実的なものにしなければならない。

- 小中学校よりも時間に余裕があり、保護者の意識が高い幼稚園・保育園においても防災教育に取り組むことが有効。
- 発災を自分のこととして考える「防災小説」の紹介。

そして、江口委員から、LINE 株式会社の取組について、下記の説明があった。

- 災害時における情報を見極めるための訓練と、キーワード「だいふく（誰が言ったか・いつ言ったか・複数の情報を確かめたのか）」について。
- スマートホンで災害時の対応を疑似体験できるゲームの紹介。

両委員の説明を受けて、各委員からいただいた主なご意見は以下のとおり。

- 異年齢保育を実施しているある幼稚園において、東日本大震災の時に年長さんが怖がる年少さんを一生懸命なだめていた、という事例がある。かなり年齢の小さい子どもへの防災教育においても自分の命を守り、周りに目を配ることを実現できる。
- ある保育園では、様々な条件（季節、天候、先生の数、ルートなど）で、目的地を高台とする早足散歩を普段実施していた。これが東日本大震災の時に保育園の全員が助かるという事例につながった。この鍵は普段のお散歩というアクションと、まさかの時の対応にあったと考える。
- これまでの防災教育は教員と子ども達との縦の関係で実施されていたが、子ども達同士で議論し合い、気づき合うことにより、指導とは違う効果があるのではないか。
- 総合的な探求を行う「総合的な学習の時間」で防災教育を扱い、子ども達が色々な課題を見つけるといった活動に組み込めば良いと考える。
- 防災教育や避難訓練が形骸化しているので、教員は今までの考え方を払拭し、柔軟性を持たなければならない。例えば、理科の実験中や体育の時間、下校中、子ども達が公園で遊んでいる時など、どのような危険があるのかを検討すること。校長先生と教頭先生が二人揃って不在の時もあり得るので、この時に災害が起きたら学校はどのように動くのかという訓練を行うことも必要。
- 現在、高校1年生のある男子が、2月13日の福島県沖地震の際にすぐにパジャマを着替え、リュックを背負い、外に出ようとした。これは彼が幼稚園の年長だった時に東日本大震災を経験し、当時小学4年生だったお兄さんが彼の手をつないで避難所に向かって走った経験からの行動であり、幼児期の体験は非常に大切なことだと考える。紙芝居や歌などの中で防災を植え付けるといった実践はとても良い。
- 防災教育で1時間を取る必要はなく、何らかの教科や教育活動の中に、「いきる かかわる そなえる」のキーワードを組み込んだ防災教育を行うことが重要。
- 未就学児の防災教育は重要な課題。幼稚園や保育園でここまでやって、それをもって小学1年生からはここからスタートしましょうと、しっかりと計画を立てて実施されることが重要。

- 子ども達にゲーム感覚で防災教育や訓練をしてもらうことができるのは面白い。
- 防災教育において、保育園・幼稚園から小学校、中学校とこれらの間をシームレスに実施するため、非認知能力の観点からも、その年齢に応じて教えるべきことのある程度の標準化が必要ではないか。
- 防災教育の中に「だいふく（誰が言ったか・いつ言ったか・複数の情報を確かめたのか）」により情報をきちんと取捨選択できる訓練をして、実際の災害時に適切な情報共有ができるようにすることは重要。
- 災害時にデマが拡散した結果、どのようなことになったのか、を伝えることも必要だと思う。
- 災害時における情報を見極めるための訓練は大人にも必要。
- 子ども達同士の議論を促すことや、子ども達が自分で課題を見つけられるよう促すことができる指導力をどのように現場の教員に持ってもらうかが課題。
- 何年生には何を教えるべきというアプローチには光と影がある点を意識しておくことが必要。きちんと整理・実施されるのであれば光となる場合が多いが、予定どおり実施できなかった場合に問題が生じる。これについて、複式学級や異年齢保育などで複数の年代が一緒に学ぶという対策が考えられる。

**また、赤澤副大臣から会議中に下記の考えが述べられた。**

- “短い訓練の繰り返し”はキーワード。短い時間で実施可能なこと、繰り返しにより身に付けることは重要な要素。
- 義務教育に加えて、時間的に余裕があり、保護者が真剣などの理由で非常に有効な幼稚園又は保育園の未就学児からのシームレスな防災教育の展開についても検討が必要。
- 災害時の情報を見極める際に「だいふく（誰が言ったか・いつ言ったか・複数の情報を確かめたのか）」は非常に重要。